

23年度および24年度が30%未満であった。

3. 歯科補綴系、口腔外科系と比較して66.8%が歯科保存系治療を症例報告に用いていた。歯科保存系の治療内容を分野別でみると、歯内系治療が若干少ないものの、ほぼ均等であった。

4. 指導歯科医・協力歯科医は半数近くが保存系分野であった。

【考察】1. 多くの年度において当院での研修期間が長いAプログラムが多く選択される傾向にあったが、平成24年度ではBおよびCプログラムの院外での研修を選択する研修医が多く認められ、平成23年度および平成24年度では研修修了後に本学に在籍した者も少ない傾向にあった。これらは東日本大震災後の影響が関与しているものと考えられた。

2. 症例報告からコンポジットレジン充填、スケーリング、感染根管治療などの歯科保存系の治療が研修医の高頻度治療であることが推察され、それにとまって指導に関わった歯科医師も歯科保存系の者が多い傾向にあったと考えられた。

【結論】1. 奥羽大学歯学部附属病院において10年間で412名の臨床研修歯科医師が研修プログラムを修了した。

2. Aプログラムの選択が多い傾向にあったが、平成24年度ではB、Cプログラムが多く選択された。

3. 症例報告では歯科保存系治療が多く、指導した歯科医師も歯科保存系分野の者が多い傾向にあった。

10) 自傷行為防止のためにマウスガードを応用したLesch-Nyhan症候群の一例

○関野 貴大, 高橋 俊智, 三科祐美子
安積 優衣, 畠山有紀子, 赤城 千佳
永山 道代, 加川千鶴世, 島村 和宏
(奥羽大・歯・成長発育歯)

【緒言】Lesch-Nyhan症候群は核酸代謝酵素の遺伝子変性による伴性劣性遺伝である。全身所見として不随意運動、精神発達遅滞、高尿酸血症がみられ、歯科的所見では口腔粘膜の咬傷が多い。今回、Lesch-Nyhan症候群患児に対し歯科的管理を行う機会を得たのでその概要を報告する。尚、

今回の発表に際し、保護者の同意を得ている。

【症例】初診時年齢1歳9カ月の男児。下口唇裂傷の精査、加療を主訴に当科を紹介、受診した。

既往歴：クレチン病、肛門周囲膿瘍、高尿酸血症、精神運動発達遅滞

家族歴：特記事項なし

現病歴：生後11カ月頃より下口唇赤唇部に口傷による実質欠損と潰瘍が認められ、近医を受診した。下唇を外反しテープ固定で経過を診ていたが、下口唇辺縁の欠損が著しいため、他の対応策を希望し当科初診となった。初診時には、上下顎両側第1乳臼歯まで萌出しており、上顎右側乳中切歯と乳側切歯は癒合歯と思われた。上唇小帯の高位付着と下口唇一部欠損および潰瘍も認められた。

【治療経過】初診後体調不良のため未来院となり、2歳4か月時から、下口唇の咬傷悪化を防ぐため上顎にマウスガードを装着した。マウスガード作成にあたっては、できるだけ咬合に変化を与えないように心掛けた。5歳頃から拒否行動が強くなり、印象採得に苦慮するようになったため、口腔内の精査と初期治療、ならびに印象採得を目的に全身麻酔下での処置を選択し、修復処置と印象採得を行い、マウスガードを作製装着した。

【まとめ】2歳4か月時から、マウスガードを装着することにより、歯の咬耗や破折を防ぎ、咬傷による軟組織へのダメージを軽減することができた。今後、永久歯への交換に伴い口腔内の違和感から、咬傷が頻発する可能性もあるため、定期的な観察を続けながら、予防に努めていきたいと考えている。

11) Fusuma sliding flap法を用いた下唇癌切除後の下唇再建の1例

○松葉 雅俊¹, 河西 敬子¹, 矢代 晋一¹
秋本 哲男¹, 小坂橋 勉¹, 三科 正見¹
金 秀樹²

(寿泉堂総合病院・歯科口腔外科,
奥羽大・歯・口腔外科²)

【緒言】下唇癌の手術では下唇の全幅・全層が失われ、顔貌の整容性と口腔機能が著しく損なわれることが多い。今回われわれは、下唇癌切除術

による下唇欠損に対して Fusuma sliding flap 法を用いた下唇形成術で整容性と機能が改善した1例を経験したのでその概要を報告する。

【症例概要】

現病歴：患者は84歳、女性。2012年に左側下唇部に腫脹を自覚したため近内科医院を受診した。ステロイド軟膏を処方され塗布するも改善が認められず、2015年近総合病院皮膚科を受診した。生検の結果、扁平上皮癌の病理組織学的診断を得たが患者の都合により放置していた。今回歯科治療を目的に近総合病院歯科を受診した際に精査加療をすすめられ、2015年11月紹介により当科初診となった。

症状および経過：初診時下唇正中やや左側にφ25mm×18mmの腫瘍を触知し、赤唇に表面粗造なφ20mmの潰瘍を認めた。また、左側頸部に複数の硬結を伴うリンパ節を触知した。初診時に画像検査と生検を行い扁平上皮癌の病理組織学的診断を得た(cT2N2bM0 Stage IV A)。2016年1月全身麻酔下での腫瘍切除術、左側前頸部郭清術、術中迅速病理組織診断を行い、Fusuma sliding flap 法による下唇形成術を行った。

【考察】本症例で Fusuma sliding flap 法が適応となった理由として、①切除範囲が赤唇の範囲内だった。②整容性にすぐれており機能的再建が可能であった。③鼻唇溝付近の皮膚に余裕があった、が挙げられる。

術後は癒痕拘縮を伴う手術侵襲により運動機能および知覚が低下した。回復するには長期間を要するため適切なリハビリテーションと定期的な経過観察が必要であると考え。本術式により鼻唇溝が浅くなったため顔貌が若々しく変化し患者の満足度が向上した。

【結語】今回われわれは84歳女性の下唇癌切除後の下唇形成術に Fusuma sliding flap 法を用い、整容性と機能が改善した1例を経験したので報告した。

12) 当科における細胞診の有用性について

○浅倉 彬人, 御代田 駿, 菅野 勝也
川原 一郎, 浜田 智弘, 金 秀樹
高田 訓
(奥羽大・歯・口腔外科)

【緒言】細胞診は、患者に対して外科的侵襲が少なく、安価で繰り返し検査が可能である。

今回、口腔粘膜疾患に対する細胞診検体を解析し、内訳および有用性について検討を行ったので、その概要を報告する。

【対象と方法】2013年1月～2016年3月までの39ヶ月間に当科で細胞診(浸漬固定法)を施行した176例、185検体をもとに男女比、年齢分布、実施時期、細胞診施行時の臨床診断名、細胞診の判定結果、病理組織診断との比較と正診率について検討を行った。

【結果】性別は男性78例、女性98例で女性に多く施行されていた。

年齢分布は、60歳～69歳が最も多く47検体が施行されていた。平均年齢は64.9歳であった。

実施時期は、細胞診の多くは初診時に施行されており144検体認めた。

細胞診施行時の臨床診断名は、悪性腫瘍が57検体30.8%で最も多かった。

細胞診の判定結果は、class IIの77検体が最も多くclass Vが1検体で最も少なかった。

細胞診を施行した検体のうち病理組織診を行ったものは60検体あった。

細胞診でclass IIと判定された検体の病理組織診断の結果は、上皮異形成が多く正診率は35.7%であった。

class III aの病理組織結果は、上皮異形成が多く正診率は78.9%であった。

class IIIの病理組織結果は、扁平上皮癌が多く正診率は68.8%であった。

class III bの病理組織結果は、扁平上皮癌が多く正診率は88.9%であった。

class IV及びVの病理組織結果は、いずれも扁平上皮癌であり正診率は100%であった。

細胞診の精度は、悪性腫瘍30検体の内class III a以上であったものは27検体あり感度は90.0%を示した。また悪性腫瘍30検体の内class II以下で